

苅部直著 『安部公房の都市』

大場, 健司

<https://doi.org/10.15017/1398580>

出版情報 : 九大日文. 21, pp.88-91, 2013-03-29. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

◎書評

苅部直著 『安部公房の都市』

大場 健司



などの作品を想起させる。帯にはこうある。

都市のまなざしと、デモクラシーの果てにある「個」。拡大しながら刻一刻と廃墟へ向かう1960年代の東京で、作家は何を語ったのか。満州の経験呼びおこし、時代の熱気とともに充実する中期の作品群を、人気政治学者が読み解く

本が見ていた。

装画は、駒井哲郎の銅版画「魔法陣」。八つの絵を組み合わせたような銅版画で、「目」や「部屋」を描いたものが、とくに安部公房の『箱男』

その下には大きな字でこう書かれている。「見られることには憎悪がある」。この箇所は、『箱男』に収められた本文写真に付された文章から引用されたものである。『箱男』には「見ることには愛があるが、見られることには憎悪がある」（『安部公房全集24』新潮社、一九九九年九月、四四頁）とある。この、サルトルを想起させるような「見ることと見られること」の「まなざし」は、帯にあるような「都市のまなざし」、装画に描かれた「目」の「まなざし」となって、本書の中で語られている。その「まなざし」は、何を見ているのか。

本書は、「安部公房を読む」というタイトルで文芸誌『群像』の二〇一一年一月号から一二月号まで連載されたものをまとめたものである。また、研究が比較的手薄な六〇年代の「都市」を舞台にした作品が主に扱われているのも特徴である。

第一章「夢の不安」では『笑う月』が扱われ、マルティン・ハイデガー『存在と時間』における、「恐怖」と「不安」の区別が参照される。『笑う月』所収の「笑う月」では「夢」が「恐怖」としてではなく自己を根本から脅かす「不安」として「生け捕り」にされているのだと論じられている。その「夢」を「生け捕り」にする言葉は「都市の言葉」につながっているのだという。同じく「笑う月」の夢が登場する『燃えつきた地図』においては、その「不安」が都市空間を舞台にして描かれている。第二章「都市の夢語り」では、『燃えつきた地図』が「都市」や「夢」、「まなざし」を主題に据えて都市論的に論じられている。農村社会とは違い、都市では職業や人間関係において多く

の選択肢があり、その点で都市生活にはつねに「もう一つの人生」という「夢」がつきまとっているという。この「もう一つの人生」という表現は、「他の可能性」としてのデリダ的「幽霊」を連想させる。また、この章では、都市生活における「見られずに見る」のぞきについても触れられている。主人公の探偵は写真に写った人物を双眼鏡で凝視する。視野が制限された中で「見られずに見る」のぞきや双眼鏡の映像と、コラージュ的な夢のあり方には類似性があるという。

第三章「穴だらけの街」ではまず、都市における「風景の発見」が説明される。探偵が訪れる団地の「風景」においては、近所の住民でさえ「透明」な「風景」の一部と化す。失踪者の妻が「化粧」をした様子を見て、探偵は「霧が流れ動く、はるかな夢の町」を想起する。苅部氏はここで、「夢の町」の「風景」の美しさは「額縁」の中にあつてはじめて成り立ち、彼女の「内面」は「額縁」としての「化粧」なしてありえないと論じる。その「額縁」の奥にある「不透明」なものは「額縁」なしでは理解しがたく、これが、安部公房が念頭に置いていた、都市の重要な性質だろうと述べられている。ここでは柄谷行人への言及はないが、この箇所が柄谷を参照していることは疑いようがない。柄谷は『定本日本近代文学の起源』（岩波書店、二〇〇八年一〇月）の第一章「風景の発見」において、「風景」が「遠近法」のような「象徴形式」（カッシーラー）をとおして発見されたことを示している（二二頁）。その第二章「内面の発見」では、市川団十郎の歌舞伎を例に、「化粧」によつて「素顔」

「内面」が逆説的に発見されたことを示している（五二―五三頁）。苅部氏が言う「額縁」とは「象徴形式」のようなものであり、これをとおして団地の「風景」や彼女の「内面」が発見されるのである。

また、この章では、作品内の描写や当時の地下鉄の状況などを手掛かりに、「台町」にある団地が落窪団地（現・杉並区落窪三丁目）にあることが実証的に証明されていて、意義深い。その団地の様子も「台町」団地とほとんど同じなのだという。ここで重要な点として指摘されているのは、「都市」の周縁を好んで描く安部にとつて、「都市」とは拡大するにしたがつて、絶えず廃墟や廃棄物を生み出すということだ。その廃墟や廃棄物が、安部自身の満州体験、終戦体験につながっているのだという。また、この作品には、始めて祝日として実施された「建国記念の日」の記述がないという大きな「穴」があることも指摘されている。

第四章「もうひとつの歴史」では、『榎本武揚』が同時代の言説との関係から論じられている。当時、江藤淳は、都市化や近代化で失われた民族のアイデンティティを回復するために明治百年や明治人、勝海舟を評価した。その明治百年を目前に、『榎本武揚』では榎本武揚という「非英雄」が主人公にされている。この小説で榎本らは、明治国家や勝海舟の場合とは異なる「国家」というものを相対的に考える思想」（七四頁）にもとづいて「共和国」を建設する。ここで苅部氏は、この作品で描かれているような、口伝えで広まって消滅したり歪められたりす

る「もうひとつの歴史」が国家公認の歴史を覆す可能性について論じている。荻部氏は「あとがき」で「自分自身の仕事としては、『丸山眞男——リベラリストの肖像』の、主題を変えた続編として書いたつもりも、実はある」（二三七頁）と語っている。そう考えた場合、「もうひとつの歴史」というこの章のタイトルが、『丸山眞男——リベラリストの肖像』（岩波書店、二〇〇六年五月）の第五章「人間と政治、そして伝統」第三節「もうひとつの伝統」にちなんだものなのだと分かる。その「もうひとつの伝統」では、丸山とミシェル・フーコーの共通性として、これまで支配的だった歴史や伝統とは異なる「もうひとつの可能性」を再生しようとしていることが挙げられている（二〇三—二〇四頁）。このように考えた場合、荻部氏が安部公房のテクストに、丸山やフーコーの場合と共通するような、ありえたかもしれない「もうひとつの可能性」を再生させるといふ脱構築的なものを発見していることが分かるだろう。

第五章「まぼろしの共和国」では、フランス革命がもたらした、君主への「忠誠」を必要としない「共和国」という「自由」の空間には、「君主以上のもの」への「忠誠」があったことが論じられている。この章では、『榎本武揚』が、花田清輝と吉本隆明の論争において、花田を擁護するために書かれたのではないかと論じられており、示唆に富む。吉本は、花田が戦前には国家主義団体、東方会の雑誌『東大陸』に盛んに寄稿し、戦後には共産党に属する左翼知識人として活動したことの「無責任」を批判した。これは「戦争責任」および「忠誠」の問題と

関連している。『榎本武揚』では、このような「忠誠」の問題が、藩士が「徳川への忠誠」と「大名への忠誠」のどちらを優先すればよいのか、というダブル・バインドとして描かれている。この「忠誠」の問題は「丸山眞男」でも論じられたもので、荻部氏はその問題への考察を深めていることがうかがわれる。

第六章「忠誠のアレゴリー」では、戦時中の国家への「忠誠」が、戦後では「裏切り」になってしまふことについて論じられている。『榎本武揚』は、安部の共産党離脱と結びつけて「転向小説」と評されることが多かったが、荻部氏はヴァルター・ベンヤミンを引用しながら、「アレゴリー」としての『榎本武揚』が、「歴史」とはならず放置された過去の断片に目を向けていると論じる。つまり、ここでは「歴史」にはならなかった「もうひとつの可能性」を再生させる「脱構築としてのアレゴリー」が発見されているのである。このことは、「アレゴリー」を脱構築的に論じたポール・ド・マンの批評とも関連するだろう。

第七章「断絶した未来」と第八章「海中のユートピア」では『第四間水期』が扱われる。第七章ではまず、『榎本武揚』にはジャック・フィニイ『盗まれた街』の影響があるのではないかと論じられており、興味深い。また、『榎本武揚』が現在から過去を類推し尽すことの不可能性を提示するように、『第四間水期』は未来を予想し尽すことの不可能性を提示している。第八章では、『第四間水期』に登場する「予言機械」が予言した「唯一の未来」ではなく、多様な可能性を含んだ「断絶した

未来」がこの作品では提示されているのだと論じられている。

第九章「故郷としての荒野」ではまず、『第四間氷期』の舞台になった研究所が、都市の周縁の「影か穴ぼこのような位置」にある「未登録の空間」（二五七頁）にあったことが示される。

そして、その都市の原風景が、安部が少年時代を過ごした満州の奉天（瀋陽）にある、「ゴミ捨て場と化した沼に由来することが指摘されている。また、満州での体験が反映された『けものたちは故郷をめざす』においては、執筆当時、共産主義に幻滅した安部の、共産党政権によって弾圧された作家、蕭軍への共感が作品の構想に影響を与えているという。

第一〇章「ある国家の経験」では、国家が押し付けるアイデンティティを拒否するユダヤ的な都市の性格や、終戦後の奉天の「無政府状態」を安部が肯定していることが論じられる。また、『終りし道の標に』の改作の背景には戦後の「都市化」の問題があったのだという。

第十一章「砂の領域」では『砂の女』が扱われている。花田清輝が主張した、流動しながら新しい世界を創造するという沙漠の「プラスチックな性質」が『砂の女』で強調されていることが示される。都会と砂の穴とが結局は同じものであることを発見した主人公の戦いとは、「二つの方向」に限定されない「多様な生の道」を切り開こうとするためのものだったという。

第十二章「窓から覗く目」では『箱男』が扱われている。安部の小説やエッセイには、しばしば「ゴミ捨て場」のような空間が、自然／人工、原野／都市といった二項対立のあいだに登

場する。「ゴミとそっくり」の「箱男」もそのような存在であることが指摘される。また、「デモクラシー」が普遍性や個人の権利を否定する「国家」と対立するという安部の主張を受け、この「デモクラシー」とは、個人が共同体内部でのアイデンティティを否定しながらも他者と共存しようとする枠組みであり、『榎本武揚』における「共和国」のように「自由」なものなのだと言われている。一元化された消費社会に対抗して、「箱男」は徹底して「個」にしがみつくのだという。

専門の政治思想史の研究と文学研究には大きな差がないと、荻部氏は言う。それは文化全般に、どのような社会が正しいのかという思考があるからだという（関川夏央、荻部直対談「時代精神を読む『作品論』の試み——『東と西 横光利一の旅愁』と『安部公房の都市』をめぐる」、『群像』二〇一二年一月号、講談社）。本書では一貫して、抑圧された「もうひとつの可能性」が、そのような社会として再生することが論じられている。「榎本武揚」は「もうひとつの歴史」を、『第四間氷期』は多様な可能性を含んだ「断絶した未来」を、「箱男」は国家と資本に対抗する「デモクラシー」を提示している。この「デモクラシー」とは、何者でもない自由な個人が共同体外部の他者との交通を探究する、柄谷行人の言葉で言うところの「アソシエーション」のようなものだろう。安部公房のテクストが提示する「もうひとつの可能性」を考察するうえで示唆に富む一冊である。

二〇一二年二月 講談社 二三七頁 一七〇〇円＋税

九州大学大学院比較社会文化学府修士課程一年